ART KISS LETTER

Contemporary Art Museum, Kumamoto

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

vol. 13

2002.7.15 熊本市現代美術館発行

WORLD NEWS

マニフェスタ4　MANIFESTA4

Hans Schabus <Western> 2002
ハンス・シャバス<おあべ>2002

Anital Lakner <INERS-Home transporter> 1999
アンタール・ラクナー<INERS-ホーム・トランスポーター>1999

ドイツのフランクフルトで「マニフェスタ4」が開催されています。（5月25日～8月25日）。この展覧会は1996年にオランダのロッテルダムではじまり、以後ルクセンブルク、リブリャナ、そしてフランクフルトと、2年ごとに開催地を変えてきた国際美術展です。大きな特徴は、ふだんあまり知られていない東ヨーロッパの現代美術の紹介ということにありますが、今回は地域を限定せず、世界の若いアーティストの実験的な作品が注目を集めました。

2002.5.1～5.31のギャラリー展評

[アート・ド・ギャン]

ART DE GYAN

※もう、おわかりですよね！熊本弁で「アート、どう？」の意です。

四季の彩

熊本市上通4-10トラヤビル　☎351-8332

● **「女性四人展」**(5.1～5.31)浅井ゆかりさん、清藤陽子さん、中山理恵子さん、河内晃子さんらファルベのメンバーの4人による油彩、水彩、テンペラの作品12点の展示。(K・T)

ギャラリーカフェ　ブリランテ

熊本市桜木2-14-5　☎369-0095

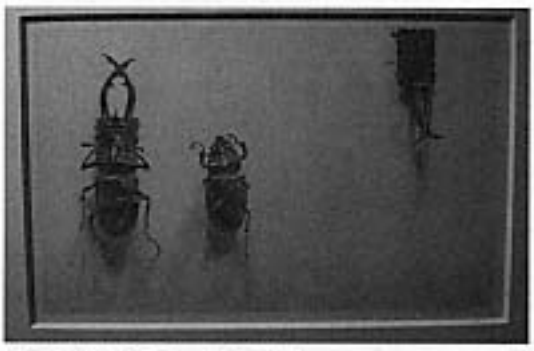
● **「トールペインティングと古布の仲間たち」**(5.1～5.15)井手久美子さん、坂上美和子さん、中山洋子さんの、トールペインティング及び古布を利用した小物の展覧会。ちりめんの素材感を生かしたオーナメントやひな人形などに、深い味わいがあった。

● **「エッチングガラス展」**(5.16～5.31)ガラス工房エアークリエイトの田添寛治さんと田添英子さんの作品展。エッチングガラスは、ガラスに絵などの模様を彫り出したもの。素材感のよさに高度な技術が加わり、洗練された高級感が漂う。(K・K)

画廊喫茶三点鍾

熊本市手取本町3-8有明ビル　☎326-3040

● **「松尾輔個展　PENCILWORKS AND OTHERS」**(5.1～5.10)会場には虫眼鏡。作品はこれを通さなければ見えないほど細密な鉛筆画が中心だ。《ひと夏の思い出》は昆虫の脱(むくろ)にわずかに残された、オブラートのような生の気配を写しとっている。久しぶりに興奮を覚える充実した作品に出会えた。



松尾　輔さんの作品《ひと夏の思い出》

● **「小島洋子キルト展」**(5.11～5.20)制作歴20年を誇る小島さんのキルトは、まさにアジアのキルト。インドの大地をテーマにしたモチーフを鮮やかな彩色でみせ、熊本のキルト界の層の厚さを感じさせた。

● **「コラボレーターの会第6回小品展」**(5.22～5.31)「コラボレーターの会」は熊本市民美術展をサポートするボランティアグループ。正木憲明さんの《ジューンブライド》は、私たちが忘れかけている夢や希望といったものを素直に思いださせる。(A・S)

正木憲明さんの作品《ジューンブライド》

ギャラリーキムラ

熊本市水道町3-5(上通Kビル9F)　☎327-0166

● **「「わたくし美術館」収蔵展」**(5.6～5.12)池田清寿夫、馥嗣(あいおう)、草間彌生のシルクスクリーンなど版画作品(個人コレクション)の展示。

● **「現在アート展～クロスオーバーする世界～」**(5.20～5.26)上野スミオさんの主宰する絵画グループ13人の作品約30点の展示。(K・T)

熊本YMCA国際センター

熊本市花畑町フコク生命ビル8F　☎352-2390

● **「アン・ビクトル写真展　百年の記憶」**(5.12～5.26)は、旧ソ連に生きる高麗人の運命と希望の物語と副題がつけられているように、ビクトルの生に関わるテーマが追求されていた。(Y・H)

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F　☎343-9664

● **「芸術家の町ⅰ西合志町展」**(5.1～5.10)今年で6年目を迎えるグループ展。個性的な作品が並ぶ。園田伸也さんの《赤い聖堂》、廣石郁さんの《龍と瓶》は小さな画面の中に、効果的に色彩を配置する術と、やや感情的な集中力を映し出すことに成功している。大きな作品も見てみたい。

左源俊子さんの作品

● **「三人三様展」**(5.11～5.20)日田セイ子さん、坂本悟さん、野田 豊さんのグループ展。坂本さんは懐かしい香りのする風景を水彩で、野田さんは教会の風景を中心に展開。日田さんは《放射冷却》シリーズという幻想的な雰囲気を描いた作品をみせていた。

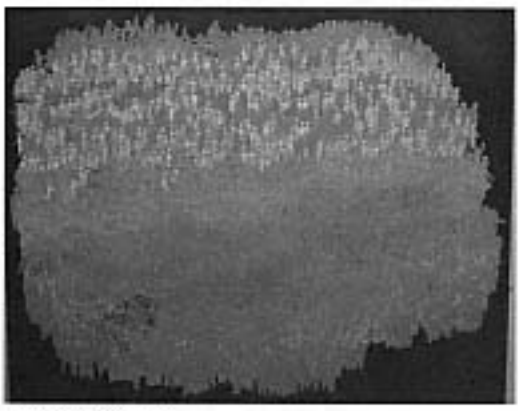
● **「芸術家の町Ⅱ　合志町展」**(5.21～5.30)書、日本画、パステル、油彩など様々な作品が並ぶ。花の色使いに気を使った作品が多く、色彩へのこだわりが感じられた。(H・T)

熊本県立美術館本館・分館

熊本市千葉城町2-18　☎351-8411

● **「第6回カラースペース絵画展」**(5.1～5.6)は田口省一さんのもとで学ぶ19名の作品展。河野信子さんの《緑側》は外に向かっての大きな広がりを感じさせ、晴れやか。

● **「熊本独立作家展」**(5.1～5.6)は、個人の活動も活発な22名が、いずれも重厚な作品を発表。



堀田静子さんの作品

● **「RKK学苑金曜洋画教室展(昼)」**(5.1～5.6)では雨森三郎さんが講師を務める教室の17名の方の作品展。野島幹夫さんの力強く坦を張る《タンポポ》は鮮明で、印象的。

● **「松永社アート展」**(5.8～5.12)は近作のアクリル画23点で、穏やかさの中に勢いを感じさせる大作であった。

● **「福永幸夫染色展」**(5.8～5.12)では、多様な手法の作品が並び、その展示方法も新鮮で、絵画的な世界を味わうことができた。

● **「第32回アリの会作品展」**(5.8～5.12)は桜山中学校PTA文化部活動の一環として始まり、今年30年を迎えるという。長く続いてきたグループの絆が感じとれる、温かみのある展覧会であった。

● **「第6回書節選抜書道展」**(5.8～5.12)広深書道会が発刊する『書節』会員から選抜された122人が、行草書や、かな、調和体書など額や軸で123点を展示。江上蒼龍会長は五言対句と去年の日展出品作を展示している。オーソドックスな漢詩の行草書は、変化に富み、力強さもある。野口翠山さん、平山翠石さん、平方研水さんの作品が目についた。(S・K)

● **「第55回示現会巡回熊本展」**(5.14～5.19)での、小材哲治さんによる石仏は、深く、力強く行む様が巧みに描かれていた。

● **「第24回虹の会版画展」**(5.14～5.19)では出石晴美さんの《あしたのこと》、谷口和子さんの《遊ぶ》などの詩情のある作品や、丁寧に彫り込まれた風景作品などそれぞれの世界を作り出していた。(Y・H)

● **「書熊会書作展」**(5.21～5.26)書家の堀田雅石さんが主宰する書熊会員64人が、74点を軸や額で展示。堀田会長は漢字で芭蕉の詩と、かなの和歌一首を出展している。小川彩葉さんの朱肩の詩をはじめ、漢字やかな、調和体の作品が主である。自由で闊達(かったつ)な表現が会場を楽しく見せている。(S・K)

● **「第2回林原由貴子油彩水彩画個展」**(5.21～5.26)ではイタリアの風景を中心とした軽やかで明るい色彩の絵が並んだ。

● **「済々黌創立120周年記念第5回済美展」**(5.21～5.26)は昭和7年卒の同窓生から在校生までが出品。現在も美術に関わりのある仕事をしている人が多く、緊張感のある展覧会であった。(Y・H)

● **「第15回紅華会書作展」**(5.21～5.26)香樓会に所属する田中小華さんが主宰する紅華会の39名が、「源氏物語の中の好きな和歌」を仮名表現した作品展である。線質の練度高く、引き締まった構成の漢字作品が多いが、各人が色とりどりの扇面を豪華に並べた光景は印象に残った。(T・M)

島田美術館ギャラリー＆島田美術館蔵寸館展

熊本市島崎4・5・28　☎352・4597

● **「光・風・布・宮崎直美個展」**(5.3～5.14)

● **「真木緑個展」**(5.17～5.28)大作3点を含む約25点の油彩、水彩作品。人物を主題にした100号の3点はいずれも前へ進もうという意欲が組立てや、色彩、マチエールなどから感じられる。小品とともに見ごたえある展示。(K・T)

ギャラリー喫茶去

熊本市千葉城町3・7　☎359・0132

● **「東雲展」**は、柔らかな色彩のハーブ染めの中原祐子さん、古布の服や小物の浜口理佳子さんの二人展。

● **「堀本知子　個展Aero (宙)2001-2002」**(5.21～6.2)は、青、金、緑を基調にした日本画で、いずれも海の中に光がゆったりと沈んでいくような時空を感じさせた。(Y・H)

ギャラリーレストラン芳文

熊本市南高江5・7・78　☎311・3344

● **「第3回蓮華ふれあい「詩」の作品展」**(5.3～5.10)では、大和蓮華さんによるあたたかな言葉が会場を包んだ。

● **「Dream Hearts' 仲間の展覧会」**(5.12～5.19)は安田千帆さんプロデュースによる6人の作品展。それぞれが自分の世界を作り上げることに喜びを感じていることがうかがえた。

● **「第5回グループわかば作陶展」**(5.22～5.29)は宇土市生涯学習課のやきもの教室を卒業した方々の作品展。前田和さんの指導をうけ、しっかりとした基本をふまえ、それぞれ趣向をこらした作品であった。(Y・H)

上田恵美子さんの作品

ジェイ

熊本市大江本町6・9(妹尾天神電停前)　☎372・8732

● **「ジェイ企画展」**(5.1～5.10)では、ジェイに集い、オーナーの永田さんのアドバイスをうけながら、描いている方々の伸びやかな作品が並んだ。

(左より前)吉井泰子さん、住永リエ子さん
(後)尾田サチ子さん、中山順子さん、田口知子さん

● **「女性水墨画展」**(5.11～5.20)はTKU西日本サークルの水前寺教室のメンバーによる作品展。

● **「Oekaki1218 Tomoko & Yoshiko展」**(5.21～5.31)は、誕生日が同じ竹田智子さんと能英嘉子さんの二人展。夢に包まれたような優しい人物画が温かい。(Y・H)

アートスペース大宝堂

熊本市上通5・6　☎354・2155

● **「第36回杏美会小品展」**(5.1～5.6)描き手それぞれが興味を持っているものやイメージを丁寧に描き出している。(H・T)

● **「第13回琥書道展」**(5.8～5.13)書家沼田琥雨さん主宰の同人の会員16人が、かなや調和体作品約40点を額や軸で展示。琥雨さんは、東玉書道会展で最高賞を受賞した新古今和歌集の歌を屏風で出品している。日展参事の宮本竹逗さんのかな作品も特別出品されていた。(S・K)

● **「緒方信行写真展　美しき日本の彩り・世界の彩り」**(5.15～5.20)国内、北海道などの雄大な風景に対しては、色彩へのこまやかな心遣いが画面に表れていた。また、インドなど国外の風景に対しては、その土地特有の雰囲気への驚きや感動が画面に現れていたように感じた。(H・T)

● **「墨遊会書作展」**(5.22～5.27)田中琴園さんが主宰する墨遊会の書作展であるが、夫人の田中慧州さん主宰のいけばな嵯峨御流の展示が会場の中心と要所を占めており、書作品もお華セットにマッチさせる狙いが見えるので、協賛と言うより併催の感じで、特長ある展覧会になっていた。ただ、遊び方にも研究の余地があろう。(T・M)

● **「川上順一　スペイン・アンダルシア～光のなかで…～展」**(5.29～6.3)闘牛士マタドールと牛の戯れを描く人物画、オレンジやブドウを描く静物画や、屋根の赤さと豊かな緑を描く風景画が展示された。《プラージャ(浜)》という名の静かな浜辺の砂を描いた作品。海と空と砂しかない風景の美しさを描き出していた。(H・T)

アートルーム　イケオ

熊本市新市街6・6　☎324・1414

● **「ウィリアム　ストランスキー個展　ガーデンパーティー」**(5.1～5.6)生け花や花の庭をモチーフに、鮮やかな色彩のアクリルで描く。印象派風の表現が主だが、時に光は幾何学形に分解されて眼に飛び込んでくる。色とりどりのまぶしい庭にいるような気分にとらわれた。

● **「熊日生涯学習プラザ　パッチワーク講座作品展」**

嶋本順子さんの作品《庭と恋の夢》

(5.15～5.20)パッチワークの素晴らしさは、作者の個人的な想いが、形となって現れるところにある。お孫さんへのメッセージをこめた作品《卓と悠の夢》(嶋本順子さん)、子供の頃のおはじきやビー玉、メンコなどで遊んだ思い出をつづった《あそび》(篠家シゲ子さん)など、イメージの見事な表現に感動。

● 「手描友禅作品展」(5.22～5.27)グループ"るーえ"による手描友禅の作品展。レイアウトに苦労したという日傘は、白地にシンプルな花をあしらい、とても涼やか。(K・K)

● 「書画同源展」(5.29～6.3)熊本市の野口翌山さんが「県芸術功労者受賞記念」に開催した書画展。野口さんは若い時から描くことが好きで、書の勉強と同時に絵画の習学を積み重ねたという。好きな漢詩にちなんだエピソードを探して描き、題としてその漢詩を添えるという独自の様式がユニーク。(T・M)

アートギャラリー・コレクションOMO(オモ)

熊本市上通4・14・3F　☎356・4721

● 「川俣正コレクション展」(4.27～6.2)では、80年代以降からコールマイン田川プロジェクトまでの作品マケット、プロジェクトのビデオを展示。(Y・H)

熊本伝統工芸館

熊本市千葉城町3・35　☎324・4930

● 「宇土半島の工芸展」(5.1～5.6)16種の竹細工や能面等の伝統工芸品が並ぶ。宇土窯の作品は、身近な草花を焼き物の中に押し花のように閉じ込め、その美しさを留めている。

● 「福永幸夫染色展　ー藍に魅せられてー」(5.1～5.6)藍染の色あざやかな衣類、壁掛け、小物が並ぶ。藍染などの裂でつくった季節の小物が可愛らしい。

● 「八街門扉　泰田久史作陶展」(5.1～5.6)「伝映」と名づけられたシリーズの作品は、山を思わせるかたちにその背景の透き通るような青空を釉でうつしている。さまざまなヴァリエーションもみてみたい。

● 「第5回手づくり倉同4人展」(5.8～5.12)ネクタイ、衣服、アクセサリー、バッグが並んだ。

● 「竹と親しむ蝉と一緒押し」(5.8～5.12)清島達さんの竹を使った作品展。行燈に蝉やトンボがとまっており、涼やかな印象を出していた。虫かごから逃げ出してきたかのようなリアリティ。

● 「竜山窯近作陶磁器展」(5.8～5.12)ザラザラした石のくぼみに浅い器を置いたように見せ(石に見えるがもちろん陶器の受け皿)、中に花を生けるという見せ方には、並々ならぬ独創的な工夫を感じた。

● 「OH・Yoko展」(5.14～5.19)久保洋子さんの藍染の展示。日常着としての魅力を感じさせる藍の濃淡のヴァリエーションが美しい。

● 「博多織野次平展」(5.14～5.19)春日来迎院聖観世音菩薩像の装束復元を行った遠藤能二さんの博多織作品展。紋織りの細細で緻密な織柄には、確かな色彩感覚と完璧な職人技が見受けられる。

● 「かわりもの展」(5.14～5.19)福岡県大川市の木工職人さんたちのグループ展。俳句箱や欄間、日常の小物が並ぶ。

● 「北国の龍　乙木新年展」(5.21～5.26)龍編みのレッスンも開き、多くの参加者が楽しく龍編みに挑戦していた。

● 「波佐見陶芸協会作陶展」(5.21～5.26)生活の器、花器など焼き物の町、波佐見らしく様々なヴァリエーションが楽しめた。

● 「第10回ハイマートサロンユーリカ展」(5.21～5.26)押し花作品の背景に使われる和紙で、季節感や時刻を表現し、より情緒ある雰囲気に仕上がっている。ランプシェードに浮かびあがる草花の影も魅力的。(H・T)

喫茶りんどう

熊本市水前寺6・18・1熊本県庁本館1F　☎383・1111(内線5959)

● 「大江学園作品展」(5.1～5.31)複雑なキャラクターの模様を織り込んだビーズワーク、牛乳パックを再利用したポストカードなどが並んだ。(A・S)

藤屋百貨店

熊本市手取本町6・1　☎356・2111

● 「増村寛油絵展」(5.8～5.14)写実に重きを置く増村さんの作品展。ヴェニス風景の作品も並ぶが、熊本の四季や大地を描くことのほうが、より一層増村さんの個性を映しだしているように思えた。

● 「江副行昭ガラス展」(5.15～5.20)熔塊ガラスの作品展。ガラス質の硬質な輝きと曜変天目を思わせる色彩が印象的。

● 「第62回写団イーグル作品展」(5.13～5.20)テーマは「陽春」。咲き誇る花々、川下りの風景、毛刈したチャーミングな犬など思い思いの心に残る風景を映し出していた。

● 「ピーターパン絵画教室作品展」(5.13～5.20)造形への気配りと、色彩感覚へのこだわりがみられる。身近なモティーフをじっくりみて描く、ということへの楽しみが感じられる。

● 「小代焼　井上泰秋作陶展」(5.22～5.28)ワラ白打掛の波を思わせる、すがすがしさが眼に映える。

● 「泉村ふるさとの四季写真展」(5.22～5.28)泉村の豊かな自然と独特の祭りの様子を写し出していた。

● 「円紫会手描友禅展」(5.22～5.28)内空閑円子さん主宰のグループ展。色合いに気を使いながら丁寧に仕上げた作品が並ぶ。

● 「山中三平こけし展」(5.29～6.3)愛らしい表情のまん丸のこけしが並ぶ。昔、幼かった頃父が北国のみやげに買ってきてくれたこけしを思い出させる、やさしく穏やかなこけし。こけし柄ののれんやティッシュケースもあり、幅広い表現をみせる。

● 「第31回牛深ハイヤ祭り写真コンテスト作品展」(5.29～6.3)老若男女、祭りに汗を流しつつ楽しむ様子が写される。

牛島健一さんの作品《テビッチハイヤ》

● 「るびなす作品展」(5.29～6.3)各々すさまじい集中力と個性を前面に打ち出しながら表現している様子がうかがえる。大浦晶子さんの蝶々シリーズの、その色彩の豊かな表現と、愛らしいフォルムに眼は釘付け。ひらりと飛ぶ蝶を、憧れの眼でみつめる晶子さんの笑顔が思い浮かぶようだ。(H・T)

熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市桜町3・22　☎322・1111

● 「内田有二作陶展」(5.7～5.13)金属的な質感の「鉄変釉」による花器、皿など。

● 「太田秀隆作陶展」(5.28～6.3)福岡県小石原在住の作者による鉢・皿・壺など。(A・S)

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3・37・1F　☎326・4123

● 「元亀堂書道展」(5.1～5.7)

● 「ロゼ・ヴァンサンカン　春のバラ展」(5.8～5.10)バラの作出家、大森順子さんの展覧会。

● 「阿蘇からの風～野の花とうつわ展」(5.8～5.14)西原村のあさ工房による、陶器などの展示。天然木や野花などをディスプレイに用いて、のんびりした気分にさせる。紋取り線香を車輪に見立てたような、紋やり器のフォルムがおもしろい。

● 「地球を歩く写真展　時速4キロの海外旅行」(5.15～5.21)世界中を徒歩、自転車で旅してきた、田中逝さんの「旅行記」展。旅の途中で出会った人々の写真など様々な資料を展示。「歩きながら、幼くして亡くなった弟のことなど、いろいろなことを考えます」という田中さんの言葉から、合計7万7千キロの内容の濃さが窺えた。

● 「デジタル・アート展」(5.22～5.28)石井恵介さんの、CGによる平面の展覧会。(K・K)

ギャラリー萌

熊本市水前寺6・27・20　☎383・7001

● 「版画コレクション展」(5.1～5.31)オーナーがこれまで少しづつ集めてきたという棟唱や瑛久(えいきゅう)の版画や油彩等。日常生活の中で絵を楽しむ喜びを感じさせる。(A・S)

≪toward the complex≫ 2001
≪複合なるものに向って≫2001

Jun Nguyen-Hatsushiba

略歴：1968年東京生まれ。父はベトナム人、母は日本人。現在ベトナムのホーチミン在住。シカゴ・アート・インスティテュート卒業、メリーランド大学大学院修了。2000年の第3回光州ビエンナーレをはじめ、横浜トリエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレなど、立て続けに大きな国際美術展に招待され、現在、世界でもっとも注目される若手のヴィデオ・アーティストです。さまざまなテーマに自らのアイデンティティを重ね合わせた作品は多くの人々に感銘を与え続けています。

ジュン・グエン＝ハツシバさんが熊本訪問。

６月１４日から１７日まで、ベトナムのアーティスト、ジュン・グエン＝ハツシバさんが来熊しました。熊本市現代美術館の開館記念展「熊本国際美術展－ATTITUDE 2002」の打ち合わせに来たもので、滞在中に水俣も訪問し、水俣病資料館など積極的に調査に回りました。現在の美しい水俣の海を前にたたずむハツシバさんの姿はとても印象的でした。

SUITOTTO*KUMAMOTO

連続インタビュー NO.12

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動によせる熱い思いを語っていただきます。第12回目は熊本放送代表取締役会長の小堀富夫さんにお話を聞きました。

略歴／熊本放送代表取締役会長、熊本県文化協会副会長、茶道肥後古流小堀家12代。

熊本放送代表取締役会長

小堀富夫さん

Tomio Kobori

―― 茶道の宗家、肥後古流小堀家12代として、伝統文化の担い手でもありますね。

小堀：そもそも肥後古流の始まりは、利休七哲の一人、大名の細川三斎にさかのぼります。千利休を淀川まで見送りに行ったとき、三斎はまだ28歳の青年でした。細川の茶道は織部と異なり、利休の茶の湯の正統を守り、肥後古流（古市家、小堀家、曽野家）も細川忠利が「古風の茶の湯を能くする者」として、利休の孫娘婿の古市宗庵を肥の茶道方としてむかえたことから始まります。そもそも熊本の文化は侍文化なので、家に残された相伝書を見ても、免状を受けたその多くが武士なんですね。それはある意味で閉鎖的な世界で、「なにがあろうと絶対口外しない」っていう誓書がほとんどです。作法を他人に伝えないとなると、御茶会がない、お菓子も料理も必要がない、人に見せるお茶碗も必要としない、独自の美意識が生まれることになる。開くのではなく、閉じる文化です。「肥後六花」の世界もそうですね。文明開化がはじまり明治のはじめに伝統文化が衰弊したとき、その分、熊本の文化が復興を支えたといってもいいんです。江戸や関西からの物理的距離の遠さも、古来の文化を支え守るためによく機能したのかもしれませんね。

――茶道はおいくつのときからとなりますか。

小堀：茶道は小学校5年生の頃から祖父十一郎についてみようみまねで始めましたが、昭和18年に祖父が亡くなりまして、戦後の昭和21年、祖父の高弟だった松岡カヨさんに正式に指導を受けることになりました。16歳の頃ですね、とても厳しい方でしたが、その厳しさが深い愛情だったんだと今は感謝しています。そういう伝統文化というバックボーンがあったからこそ、新しいメディアとも積極的に関わることが出来たのかもしれません。

―― 放送メディアとの出会いは？

小堀：もともと昭和24年に熊日に入社し、27年に大阪支社に転勤しました。その頃ちょうどラジオの民間放送が始まったんです。情報が電波として発信されるそのダイレクトさに驚きました。「これからはラジオだ」との直感し、ラジオ熊本に転社して、今度は東京支社に勤務。そうしたら今度はテレビ時代の始まりでしょ。マスメディア発展の節目ごとに、私自身も転機を迎えることになったんです。インタビュー番組を作ったり、スポーツ中継のディレクターをするうちに29歳で管理職、テレビ編成部長から報道部長になりました。当時マスメディアに関わる人がいかに若かったかということです（笑）。

―― 芸術家との出会いも多かったのではないですか？

小堀：やはり海老原喜之助先生かな。話し始めると3時間ずっとしゃべりっぱなしの人でした（笑）。人言で知り合って、私が住んでいる本荘ではご近所だったのですが、本当に熊本を大事にされていました。熊本に残した文化的影響力は重要ですし、非常に強いものです。先生が新市街に残した絵の壁画が、もっと人目に触れる機会があればと思っているんですよ。その他、戦後の20年代は荒木精之さんはじめ、優れた多くの文化人がいらっしゃいましたね。

――最近のテレビに思うことは。

小堀：上品さがなくなってきているような気がします。当たると2番煎じ、3番煎じで悪い方に進んで、個人情報まで娯楽として扱うようになる。これは大きな問題です。ですから、熊本だからこそ発信できる、しっかりした内容の番組に積極的に取り組んでいかなくてはと考えています。

―― 私は「週刊山崎くん」を通して、菊池恵楓園の抱き人形の太郎君のことを知りました。本当にすばらしい企画でしたが。

小堀：あの番組を制作した井上ディレクターは、ラジオ放送を経験しているんですね。テレビは絵をみせて視聴者を説得しますが、ラジオは耳だけです。その分、緻密な構成力が必要になります。「週刊山崎くん」はとても視聴率が高い（15～6%）ですし、熊本の生活に根ざしている。そこに心に訴えてくる面白さがあれば、視聴者はちゃんと気づいてくれますね。ハンセン病と水俣病に対して、ほとんどのメディアがそのスタート地点を間違えたという、負の記憶を20世紀に残しました。だからこそ、熊本のメディアがこの記憶を踏まえて、単に興味本位で取り組むのではなく、真剣に情報を発信していくべきなんです。良い番組を作るのには、お金も必要ですが、なにより感性の豊かな人作りから始まるのだと思います。テレビが人間に多大な影響を与える時代ですから、心して作り手の育成に取り組まなくてはならない。美術館も、あらゆる年代のひとを受け入れる場所となっていただきたいですね。経営者としての視点と責任が、美術館にも必要とされている時代と思います。素晴しい美術館となることを期待しております。

―― ありがとうございました。

（5月31日、於：熊本放送本社、聞き手　南嶌　宏）

今月の展覧会

- ロンドン　テート・モダン　「マティス－ピカソ」展（～8.18）
- ニューヨーク　ニューヨーク近代美術館（クイーンズ）　「Tempo」展　（6.29～9.9）
- フランクフルト　クンストフェラインが　「マニフェスタ4」（～8.25）
- カッセル　「ドクメンタ11」（～9.15）
- 福岡アジア美術館（092－263－1100）　「イスラム・スタイル」（7.1～9.3）
- 北九州市立美術館（093－582－7777）　「シアトル美術館からの里帰り　近代の京都両堤展」（～7・28）
- 坂本善三美術館（0367－46－5732）　「東京都現代美術館コレクション　現代美術の体験」（～9.1）
- 鹿児島市立美術館（099－224－3400）　「黒田清輝展」（7.18～9.1）
- 大分市美術館（097-554-5900）　「アメリカからきた日本　クラーク家日本美術コレクション」（7.27～9.1）
- 熊本県立美術館（096－352－2111）　「夏休み子供美術館」（7.20～9.1）

今月の4コママンガ

「熱帯い」

イラストシーション：はとうあやか

編集後記

熊本市現代美術館は開館記念の第一弾として「熊本国際美術展－Altitude2002」でオープンします。内外30名による「人間の態度」を検証する現代美術展ですが、その事前の会場下見に、毎週のように、日本国内はもちろん、ロシア、エストニア、オーストラリア、アメリカ、ベトナムなどから、招待アーティストが来熊しています。皆さん異口同音に現代美術館のデザインに驚嘆し、そして来る前以上の意気込みを見せています。いよいよラストスパートです。どうぞ開館を楽しみにお待ちください。

（学芸課長　南嶌　宏）

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)
Shozan Kaneshiro
「枯れて生きる／生きて枯れる／立派に枯れるために北九州に生きる」と高見順の詩に感ずるこの頃である。

森山 淡草 (T.M)
Tansou Moriyama
サッカーのワールドカップ。毎日、新聞・テレビが注目された。長舞台での華やかなヒーローの活躍ぶりに目を奪われそうになるが、その選手達の厳しい生活環境、苛酷な練習情景には胸を突かれるものがある。それを支えて来たものは？と改めて思う。

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro
モランディーの孤独や嘆の単純な形に余分な説明はない。緊密な比例と関係の魅力がある。

学芸員紹介

本田 代志子 (Y.H)
夏といえば花火、花火といえば浴衣、これも日本的。

蔵座 江美 (E.Z)
朝顔模様の浴衣を着て夕涼み…やりたいなぁ。

金澤 韻 (K.K)
水俣病資料館へ行きました。風光明媚なところ。また行きたいです。

坂本 顕子 (A.S)
もうすぐ夏休み。開館前につき休暇どころか日曜日もあぶないウ日この頃です。

冨澤 治子 (H.T)
やはり夏といえば海です。潮風は私を元気にします。北地の夏に負けないぞ。

発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.13　2002年7月15日発行　◎無料◎
編集人／田中　幸人
編集長／南嶌　宏　　担当／冨澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合　　デザイン／松永　社デザイン事務所
発　行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7503　FAX.096-359-7894